

# 漂泊する自我 —逃げろや!逃げろ?—

追手門学院大学心理学部 准教授(心のクリニック)相談室長 溝部 宏 二 (2期生)

「逃げちゃダメだ!逃げちゃダメだ!逃げちゃダメだ!……」碓シンジ君はエヴァンゲリオンの中でこう繰り返します。TV版が放送された1995年も新劇場版が上映されている2010年も。少年が大人になる過程でクリアしないとイケない課題「自我の獲得」に直面した場面での出来事です。果たして本当に逃げているは大人になれないのでしょうか?この原稿を依頼されて、人生の正午をとっくに過ぎていくのに、あてどなく転がり続けている私を振り返ってみました。

私は、大学卒業後九州大学心療内科に入局しました。ナンバー内科での研修を終え、麻生飯塚病院でのレジデント生活に入った頃には頑張ることで自己を確立する方法にすっかり慣れっこになりました。沖縄で「ていげい」に生きる術を身につけたと思っていたのですが、大学というパラノイックな上昇志向の環境がそうさせたのでしょうか。その後、研究テーマを「ストレスと免疫」とし、生体防御医学研究所免疫学部門、テキサス大学分子生物学教室、南フロリダ大学小児科で柄にもなく研究者として生活してしまいました。免疫学の巨匠R. A. Good先生の屈託なく学問に邁進する姿を傍らで観て、眉間に皺を寄せて頑張るのがバカバカしくなり、帰国と同時に心療内科学内講師を辞して精神科病院へ移籍しました。しかし、免疫学を通して「自己が非自己を認識する精緻なメカニズムとその破綻」に出会った経験と、異邦人としての「自我の揺らぎ」の体験から「不惑」も近いのに、精神分析の門を叩き迷走を開始しました。西園昌久先生のゼミ、北山修先生のグループスーパーバイズ、松木邦裕先生の教育分析と豪華ラインナップで分析の世界を泳いでいたのですが、個としての揺るぎなさを健全とする欧米の自我概念に「これも違う」とまたまた遁走!「心理療法屋」として拾われた鳥取大学精神科では、強烈な枠組みを持つが故に揺らぎを許容する内観療法と出会い、美しくも曖昧な山陰の地で満たされた5年半の時を過ごしました。下田光三先生が初代教授を務められ、小椋力先生も助教授をされていた名門鳥取大学精神科で准教授を務めさせていただき、身に余る光栄と感じましたが、そこでも定住して所謂自我の

成熟を待つことはなく、興味の赴くまま「いけず」の暮らす街京都へ移り住みました。お隣の大阪で、臨床心理士の職を得て心理相談室で、日々子供や若者のセラピーや教育に従事しています。次に転がっていくまでは……。

「おとな」は、物事をインテグレートするパラノ(偏執)的生き方に固執し、「わかもの」はディファレンシエートするスキゾ(分裂)的生き方に逃げ込む傾向を感じます。パラノは、固執する価値観の揺らぎに遭遇すると命を絶つしかなく、スキゾは、逃げられなくなると引き籠るしかなくなることもあるでしょう。そのどちらにも染まらず、曖昧さにも耐えきれずに二分法で揺れ動くボーダーは刹那の現在のみを生きるのでしょうか。エヴァンゲリオンは多くの若者の心を捉えましたが、「確立した自我」というパラノ的な「幻の自我同一性」を求められて、窒息しそうな主人公・碓シンジ君にスキゾであり続けた「わかもの」が共鳴したのもその一因ではないかと考えています(しかし、シンジ君は最終的には逃げずにパラノ的世界の「おとな」として生きる道を選びます)。私が、こうして拙文を書いているのも、「逃げちゃダメだ!」と迷いながらも叫ぶ私の心に住むシンジ君に、「逃げるのもありだよ」と語りたいたからかもしれません。「逃げる」「逃げない」とインテグレートするはずも無い絶対的矛盾を内包したままで、二分法の世界にも陥らずに曖昧な自我の同一性を維持するべく、漂泊者として今日も転がり続けるのでしょうか。

